厚生文教常任委員会会議録

１　日　　時　　令和６年８月２８日（水）
　　９時５８分開会　　１１時３１分閉会

２　会議場所　　役場３階　第１委員会室

３　出席議員　　委員長：川上　均　副委員長：橋本晃明
　　委　員：山本奈央、桜井崇裕（欠席）、佐藤幸一、西山輝和
　　議　長：山下清美

４　事 務 局　　事務局長：大尾　智、事務局次長：川口二郎

５　説 明 員　　教育長：山下　勇、学校教育課長：渋谷直親、同補佐：下保朋子、
　　教育指導幹：山川　修

６　議　　件
（１）所管事務調査について
（２）まとめ
（３）その他

７　会 議 録　　別紙のとおり

厚生文教常任委員会　【開会９：５８　閉会１１：３１】　令和６年８月２８日

【開会　９：５８】

（１）所管事務調査について

委員長（川上　均）：只今より、厚生文教常任委員会を開催する。本日のテーマについては小中一貫教育について現在の状況を教えていただくような形で進めさせていただくのでどうぞよろしくお願いする。最初に出席者の説明をいただいて、順次説明を資料に基づいてお願いしたいと思う。

【説明員紹介】

教育長（山下　勇）：このような形で説明をさせていただくことに感謝申し上げたいと思っている。小中一貫の始まりは令和２年度である。令和２年度に検討委員会というのを立ち上げた。構成メンバーは、各学校の校長、教頭、担当教諭、教育委員会ということで、１年間かけて今後小中一貫をどう進めていくかということで検討させていただいた。令和３年度から実際に取り組みを始めたところである。令和４年、５年、６年とそれぞれ道教委の委託事業を受けて進めてきているところである。当初は令和６年度、今年が本当は本格実施という予定であったが、途中、コロナがあって十分な協議、取り組みができなかったので１年ずれてしまったが、その中で小中一貫を進めてきているところである。この間先生方にも色々勉強していただいているし、私たちも当然勉強しながら、小中一貫をどう進めるか、或いはどういう利点や問題があるのかということを協議しながら進めてきているところである。後で資料を見ていただくとわかるが、十勝もほぼ９割以上は小中一貫や小中連携ということで取り組みを進めているし、全道的に調べてもほぼ８割以上、約９割が連携、一貫という言葉を使って教育行政方針の中に必ず盛り込まれている。それだけ子供たちにとっても、先生方にとっても大事な教育のあり方ということで、昔は小学校と中学校別々に分けた教育の形をしていたが、これからはそういう時代ではなくて、繋がって、先生方も子供たちも繋がって９年間１つの繋がり、或いは町によっては幼稚園から幼保小中高までという長いスパンで子供たちをどう育むかという教育のあり方が変わってきているということで、その中の本町では、幼保連携も当然やっているけれども、そうではなくてプラス小中一貫をというように今進めているところである。詳しい内容についてはこの後課長や指導幹から色々説明あるが、今現在取り組んでいる状況と課題もあるし、来年の本格実施に向けて、さらにどう進めるかということで今取り組んでいるので、その現状についても話をしながら、色々質問等いただければありがたいと思っている。どうぞ今日は短い時間であるがよろしくお願いする。

【資料に基づき学校教育課長・教育指導幹説明】

委員長：教育委員会から資料に基づいて細やかな説明をしていただいた。資料全般を見たわけではないので、概略ということなので理解の不十分な部分も多分あると思うが、その点について併せて皆さんから質問等があれば出していただきたいと思うので、よろしくお願いする。

西山委員：しみず広報３月号を見せてもらって、一通り読ませていただいたけれども、本当にわかりやすく小中一貫校のあり方というのは良くわかったので、私からはそんなに質問することはないけれども、小学校から中学校に行くと、ギャップが今までと全然感じが違うというような、おっかない上級生の学校に行くというイメージが強かったけれども、そういうことを解消するということで、非常にいいことだと思っている。また、英語とか他の授業でも中学校の先生が行ったり小学校の先生が行ったりとか、子供たちが授業

参加しに行ってみたりということができるので、非常にプラスになっていいことだと思う。感心している。そういう中でこれからやってみないとわからない点もあるだろうから、色々考えてやっていただければいいと思う。

佐藤委員：今回の小中一貫教育については新聞紙上で知った。詳細については只今説明いただいた。他町に先駆けてのことだと思うが、取り組みについての難しい点とか課題をお聞かせいただきたい。

学校教育課長：資料の中でも簡単に紹介させていただいたところがあるけれども、まずメリットがデメリットを上回っているということで取り進めているところである。ただ、少しデメリットというか課題になっているところは、先生たちがやったことのないことに取り組んでいくというところで、勤務が混んでいるところに新たなものが入ったとき、本当に順調にできるのかというのは学校の中の課題であると思う。ただ、初めてやることは何でも産みの苦しみ的なところがあって、進んでしまえば良かったというか、何もない状態におそらくなるのではないかと、軽い見込みではなくて必ずそうなるだろうと思う。なぜかというとメリットの方が大きいから、やはりネガティブなところは皆さんで知恵を出し合って解決していくというところだと思う。どちらかというと中学校の先生が小学校に来て教えるという段差をなくすということの方が実は多い。小学校の先生が中学校に行って何をかを掴んでくるということの割合の方が少ないというようには、会議の中では話しされているが、今回も清水小学校の先生たちが中学校の方に、５時間授業の時などに６時間目に小学校中学校へ赴いて、どんな授業をやっているのだろうとか、実際生の姿を見て、小学校でもフィードバックさせるような取り組みも積極的に先生方の発案で行っているので、教育委員会が主導して行っているが、もう今自走して先生たちがどんどん進んでいる。そういうような印象を受けているところである。

佐藤委員：素人の考えだが、小学校中学校分離型では今と変わらないのではと思うが、やはり一体化が理想なのか。

教育長：本来なら一体型が一番スムーズに行くというか、色々なことで制約がなくなるので、分離型だと時間的な制約があってなかなか難しい部分がある。ただ、分離型であるけれども色々な時間を都合しながら先生方が交流し合う、話し合うことで互いに共通理解を図って先生方が１人の子供を皆で見て育てるということでは効果があるけれども、打ち合わせが十分できないという現状もあるので、そういう面では今話しているのは、小学校も中学校も６時間授業が多いけれども、５時間授業を増やしてその時間を打ち合わせの時間や交流する時間に充てていくような体制を検討しながら進めているところである。

佐藤委員：小学校中学校、先生方がお互い考え方が違うというお話があった。教育委員会も難しい面があると思うが、これについて解決方法は考えているか。

教育委員長：当然、中学校の文化と、小学校の文化は違う。中学校は当然受験が頭にあるので、そういう授業であったり考え方を持っているけれども、小学校はそういうことはないのだけれども、そういう中で一緒に授業を見合ったり、或いは一緒に授業をすることによって共通理解を図れるということが一番だと思う。そこが一番大事で、その場を作っていくということが大事だと思っている。私たちがああしろこうしろということはないけれども、そういう時間の確保のための教育課程のあり方を、私たちも一緒に考えていったりというところで、特に中学校の先生方が小学校の授業を見て丁寧にやっているから、こういう授業は大事だなと思うし、小学校の先生は中学校の授業を見てざっくりだけれど、中学校らしい授業とはこういう形だなと、互いの良さや課題も共通理解を図りながら、そこで互いに理解しながら小学校や中学校の授業をどう変えていくか、どう進めたら子供たちがよりわかりやすい授業になるか、或いは育てていけるかということで進めていく、そこが小中一貫のいいところで、それが産みの苦しみ、本当に大変な思いはしていると思うが、それがわかれば、ある程度先の見通しができるので、色々な意味での

やりやすさが出てきて、何とか変わってくと思っている。それぞれ義務教育学校や小中一貫をやっている町村を視察したけれども、同じような課題を抱えていて、いいこともあるし課題も多いと言いながら、そこを何とか先生方も知恵や工夫によってクリアしていくということが大事なのではないかと思っている。

佐藤委員：私たちの時代は１クラス56名で４クラス全校生徒が1,300人いた時代で、先生も56人を１人の担任の先生だけであった。そういう時代に子供たちもついていけない生徒がかなりいた。私たちから見てみれば投げられたというような思いもする。今30人学級で進めていて、先生も２人ついている。素晴らしい配慮をしているというのは驚いているが、1,300人いた中で、受験勉強もあるし、ついていけない生徒、私たちの当時は中学時代に肩叩かれていた。私立いったほうがいいとか、渡辺行った方がいいとか言われていたものだが、そういうことは今はないか。

教育委員長：昔に比べて子供の数は少ない、でも色々な子がいて昔よりも難しい、手がかかる子がいる。色々な家庭の事情もある。人数が少ないからといって必ずしも十分やれているかというとそんなことはなくて。でも、先生方はきめ細やかに子供たちに手をかけ、声かけながら学び、或いは生活基盤をしっかりとさせるような取り組みはしている。担任の先生とプラス支援の先生がいたり、その中で２人の先生が子供たちをサポートしながら、わからない子には声かけてわかるようにアドバイスしたりするし、時間外で勉強以外のところで先生が子供に声かけて、少し補充指導したり色々な取り組みをしながら、子供たちの学びを継続していくようにしているところである。

佐藤委員：先の講習会で清水の教育委員会は講師の先生に褒められていた。素晴らしいことだなと思っている。そういうことを続けていただきたい。

山本委員：聞いたことない話もたくさん聞けたので、そういう仕組みになっていたということがわかったのと、先生からの思いみたいなものも聞けて、なかなかない機会だったのでありがたかった。気になったところをいくつか質問したいと思うが、資料２でお話いただいた、中学校の先生が清水小学校で４年生に週１回、５、６年生に週２回ということだったけれども、これは英語の授業として今まで他の先生がやっていたのを代わりに中学校の先生が来てやってくれる授業であって、ＡＬＴの先生とはまた違う、全部英語の決まった時間の中でやっているものなのか。

山川指導幹：時間的には今言われたとおりで、国語、算数、英語というのがあるので、その時間は変わらなくて、その時間の中で昨年度までは小学校の担任の先生がその授業をやっていた。ＡＬＴの先生も毎時間来れる場合もあるし、来れない場合もあるので、それが今年度からは加配によって毎時間中学校の先生が来てやっている。小学校の先生はそれを見ていたりサポートに回ったり、時には文科省の方ではそれを働き方改革と称して、それを空き時間として活用するのも認めるとなっているし、だから逆に言うと、その時間を使って中学校見に行くという方法だってあるというような話もあったり、それはこれからの話だけれども、１学期終わったばかりでこれからになるけれども、質問の答えになっていれば。

山本委員：小中一貫と関係あるかわからないが、資料２にある、自ら学ぶ子供と情報リテラシーを身につけた子供というのはどのように作って、６年間から９年間になることも含めて、どう子供たちに伝えていくのかというのは気になっているけれどもいかがか。

教育長：これは今までどおりというか、今までもそれぞれ段階に応じて、学年に応じて取り組んできていることなので、それを継続的にいくということで。それが今までは小学校で完結したものが、中学校も含めてこれを15歳までの間に１年生は、２年生は、５年生はこうで中学校がということで取り組んでいた。だから、今までの取り組みを継続的につなげていくということで考えていただければいいと思う。

学校教育課長：情報リテラシーについては、当然その世代とか年代に応じて学ばなくては駄目なことがあると思う。いきなり４年生に高度な話をしても伝わらないので、それも系統的に９年間とおして必要な情報、これだけ情報が溢れていて管理も大変な時代なので、それを年代に応じて進めていくという考え方である。

山本委員：もう１つ、今まで６年生で、学校が分離型だったらそのままかもしれないが、６年生で１回区切りがあって、上級生だと思って役割みたいなものがあったのが、小中一貫になると、９年間になると、６年生で１回上級生という区切りみたいなことで経験できることができなくなるのか、そういった区切りを何となく残したまま上級生だという経験をこれからも積むことができるのか伺いたい。

山川指導幹：春先の報道で、大空学園の入学式の様子で小学校１年生の子供を、９年生、中学校３年生の子が制服を着て手をつないで入学していくみたいなのが、確か勝毎か道新かで出ていたと思うけれども、そういうように、１つの学校、義務教育学校になったらきっとそうなるだろうというのは想像できるのだけれども、まずは分離型ではそういうことはありえないと思う。それから、義務教育学校みたいな一体型になってそういう機会が減ってしまって、そういうものを経験できなくなるのではないかというのもあるとは思うけれども、逆にいっぱいある、普段の学校生活の中で、１、２年で組み合わせて、２年生が１年生の面倒見るなんて、よく生活科の中であったりだとか、３、４年生とか５、６年生とか、本当に１、６とか２、５とか、色々な組み合わせがあるので、入学式とか何かその１つの行事だけで切り取ると、これはなくなってしまうのかとなるかもしれないけれども、そういう部分はそれこそ教育活動、教育課程の中で、それぞれ学校で工夫をして大事な部分は他の場面で作っていくというようになると思う。

学校教育課長：今、小中一貫以外にも幼保小連携というのもやっているのはご存じだと思うが、そこも今、指導幹が話したように、区切りというところで、小学校は子ども園でここまで年長さん教えているのに、そこを連携できていないと、１年生になったときに同じことを繰り返して授業していると、でもそれを連携して確認し合うことで、ここまで学びができているから、１年生はもっと上のところからスタートできるとか、そういう教育を目指して今実際そう実践しているところなので、９年間ではなく、子ども園の頃から中３まで、ゆくゆくは高校までつなげていけたらいいと考えている。

山本委員：すごい勉強になる時間だったのだけれども、保護者の方からも、漠然的に小中一貫とは何だと聞かれる場面があったので、子どもを抱えている方がこうやってわかりやすく、知る方法というのは、広報もらうのはわかるけれども話聞いてとてもわかりやすかったので、そういった場面はこれから設けるような予定はあるか。

教育課長：去年もＰＴＡの役員に対してこういう話をしたことがあるが、今年度は学校の方からＰＴＡの方々に声掛けして周知をしていきたいと考えている。

橋本委員：先日、義務教育指導監の方の話を聞く機会があった。それで、もう道の方針としては小中一貫でやるという方向性が出ているということだったので、これはやっていくことになるのだろうと思うけれども、これが例えば遅延したりやらないとなった時に、ペナルティはないと思うが、メリットとして得ることのできないものというのがあるのか。

教育長：それはないと思う。国も大分前からこれを進めてということで出ているし、道教委も従って、各町村ではそういう教育を進めて欲しいというのがあるけれども、そういうことでは、進めていくということはあれだけども、それによってペナルティとかはないと思う。

橋本委員：広報に清水町スタイルと書いてあって、それはすごく大事だと思っていたのだが、前

回の義務教育指導監の話の中でも管内の取り組み方で、幕別と大空が一体型というか義務教育学校。清水と池田が連携していく、進めている形で、他には足寄は距離的なものがあって無理ではないかという話もあって、今日は12ページ13ページで資料いただいたので、町によって違いがあるのかというのを聞こうと思ったのだが、大体見ればなるほどというところはあるのだけれども、清水町の伝えるというのは一般的な中で、滑らかに９年間作っていくということが一番なのかと思うのだけれども、十勝管内色々な町がある中で清水町の特徴というか、特色を押さえた上での連携の仕方というもので１個書くべきものがあるとすれば教えていただきたい。

学校教育課長：清水町は十勝清水学、ここを核にして、ここが繋がりの一番なのではないかと思っている。渋沢栄一翁もそうだけれども、農業の町であることから、どういったものを生産されていて、学びの授業の中で３年生の収穫をとおして、さらに上に上がってくるとバイオガスプラントを見て、どうやってエネルギーのＳＤＧｓ循環をしていくとか、系統的な学びを９年間続けてやっていけるというのが、清水町の施設、環境がある強みではないかなと思う。

橋本委員：その地域ということで言うと、例えば清水地区と御影地区で若干プログラムが違うところがあるのだけれど、これは地域の特色を活かした中で、こういうものだということで進めていくということで理解していいか。

学校教育課長：清水町の清水地区での資源と御影地区での資源が違っていて、またコミュニティも少し違うところもあって、学びに関するところの線というのは、同じ学びで当然やっているところだけれども、それぞれの地域で特色のある、例えば御影で言うと澤山農場が、表さんがこういうのを見てもいいと、ぜひやってくれとか、環境提供するとか、そういう状況があれば当然そういう提供を受けて、清水であれば先ほども申し上げたバイオガスプラントもそうだし、例えばあすなろのところで見るとか、機会あればぜひ、橋本牧場にも行かせていただきたいと。もちろんその商工業で言うと、小学生も中学生もいつも清水印刷で、佐藤委員にも毎回お世話になって清水町の歴史みたいなところで話を伺ったりとか、そういうことを地域も含めて学びで関わっていただきたいと考えている。

教育長：今話し合っている核になる部分は同じである。核になる目標と、それぞれの地区によって少しずつ子供たちの実態が違うので、教育状況が違うので、目標も少し違ったりする。その子供たちや地域に合った目標を立てていて、その中で、それをもとにした活動となるので、そういう点では共通するところもあるけれども、ちょっとした地域の違いもあるということで、これは各町村によっては同じで、うちの町村と他の町で違うのはそういうところは当然違ってきている。子供の実態が違うし、地域の指定が違うのでそういう違いはあるけれども、基本ラインみたいなものはほぼ同じだと思っている。

橋本委員：中１ギャップというのは、私が子供のころを思ってみれば、１校で同級生６人しかいないところからいきなり何百人という学校だったので、それはそれはなものであったけれども、今でも大事なことなのだろうと思うのだが、20年くらい前に、小中一貫という話が色々なところで出ていたときに、その時は中１ギャップということよりは、小学校の中で、５年と６年あたりで、むしろ６年生を中学校にくっつけてしまった方が、体の発達だとか、心の発達だとかというものと見たときに適しているのではないかというのは、５、６年説みたいのがあったと思う。最近あまり聞かなくなったけれども、例えば分離型でやるときに、５年生まで小学校で、６年生から中学校みたいなものというのは、当時は何となく研究課題になっていたような気もするけれども、今はそこはさすがにないというような感じで進んでいると思うけれども、これからの課題としてどうなのだろう。

学校教育課長：先日も視察に行った当別学園、当別町の学校もそうなのだけれども、そこの区切

りをまさしく言われたように、中学校の８、９年生を１つの括り、上の学年で、例えば中１、小６、５年生を中学年と思って授業を膨らませてやるということを実施していた。ただ、中学生になったときに先ほども、気持ちの切り換え、最上級年生であったり、中学生になったときの切り替え、そこは制服がちゃんとあるところだったので、うちのようにジャージ登校ということではなかったけれどもという区切りはあるが、カリキュラムとしての括りとしては橋本委員言われたような、そういう形でやっているところが大空学園も多分そういう形でやられてるのではと思う。

川上委員：私の方からも若干、今色々出されたので、それ以外の部分で聞きたいと思うが、各町、分離型とか、一体型とか、義務教育型とか管内でも色々種類あるが、基本的には先生方異動しながら対応しないとならないと思うが、その辺の違いというのは、それぞれのやり方によってかなり異なるものなのかどうかというのを教えていただきたいと思う。

教育長：一体型と分離型では距離があるので、そういう上では違うと思う。一体型の方が当然一緒の中なので。一体型の中でも義務教育学校でないところもある。うちと同じく区切っている、小６までと中学区切りながら、校舎は一緒だけれどもそういう感じのと、義務教育学校はまた少し違う、そういう違いがある。ただ、一体になっていた方が色々な意味で先生方の情報共有や子供たちの動きも、交流も含めてより良いと思うが、まだうちの現状でいくと、もし新しい校舎を建て替えるとなれば一体型は一番いいと思うけれども、まだそこまでいっていないので、今は分離型の中で先生方がしっかりと子供たちと向き合いながら、よりよい教育をするためには一貫教育を進めていきたいと思っている。

川上委員：もう１点、できれば一体型の方が理想だという話を聞いたけれども、確か安平町かどこか新しくできたところは、体育館も合わせた図書館機能も持ったすばらしい施設を作ってやっているということで、例えば、清水も今体育館を新しくするという構想の中で、小中学校を建て替えて体育館も含めた一体型としてやった方が効率的にもいいのではということも昨日安平町を見て感じたが、その辺の連携という考え、構想というのは今のところは全くないのかどうか。それとも今後どうなるか、実際には体育館は令和７年に建て替えという形で進んでいるが、その辺の考えはなかったのかどうかも含めて教えていただきたいと思う。

学校教育課長：体育館を建てる計画は社会教育課の中なので、私達の学校教育の中に学校のことに関わって建てるという話は出ていない。ただ、基本設計も実施していたり構想も作っている中で、こうしたらいいというオフィシャルな話ではないが、例えば中学校の体育館も少し古くなり手狭であれば、稼働率を上げるのに中学校の体育館を併設したような、余すところなく日中使えるようなものがあってもいいだろうというようなことは話題として出ていたことはあった。川上委員長が話したように、校舎が古くなっているところもあるので、大規模改修はしているところだけれども、そういうところを考えながら併設するというのも一つ考え方。特に御影などは小、中学校古いので、今までにない発想の意見というのは大事なのではないかと聞いていて思った。

川上委員：先ほど話しの中でも出ていたけれども、教職員の方の理解が本当に必要という部分では、一定程度理解をしてもらいながらやるような形で進めているということだが、働き方改革の中で、実際先生方は業務逼迫していると思う、なかなか改善が進まないという中で、働き方改革との兼ね合いの中でどのように教職員の時間外労働だとか、負担を軽減しながら、小中一貫も進めていくというような形をどのようにとられているかをお聞かせ願いたいと思う。

教育長：１つは人である。今回、道教委で１人つけていただいた。小中一貫やるためには特にうちは分離なので、人が必要である。視察行った町村も人があったほうがいいというのがあって、人の加配をつけていただくというのが１つの方法と思っている。もう１つは６時間授業でびっしりである。それを５時間授業にして、逆にそれをやることによって夏

休み冬休みが短くなるかもしれないけれども、５時間授業を増やして放課後の時間が空くので、そこの時間で色々な協議や教材研究や準備や色々なことができるので、そういう体制をとって、時間を生み出すということ、先程言ったように人と時間が必要なので、そういうことでは、これまでもそうだったと思うけれども、時間がないと教材研究とか準備ができないので、そういう時間を生み出す大胆な方法が必要だと思っている。これついては２年ぐらい前から校長先生をとおして学校には一応投げかけていて、できればそういう形で先生方の負担を軽減できる方法があると、最近は文科省でもそういう話をしているみたいである。要するに週時間は今29時間だけれども、それを減らしてもいいという言い方をしているらしいので、まさにそういう方法も１つの方法と思っている。それ以外、私たちの頭の中ではなかなか時間を生み出すという案がないので、先生方にも色々案を出して欲しいという話はしている。

委員長：加配の先生等で対応しているということなので、例えば加配の先生を使ったときに、担任の先生は職員室の普段やらないとならない仕事をやれば、放課後その分早く帰れるだとかという対応もできると思うので、様々な方法をとっていただきたいと思う。その他全体として皆さんの方から、今質問を聞いた中で特に改めて聞きたいという話はあるか。

佐藤委員：小中一貫教育についてではないのだが、この間の新聞紙上に先生のなり手がいないという心配があった。清水はどうか。

学校教育課長：昔はすごく人気のある職業だったと思うけれども、委員長からも話があったような、働き方改革と言われるように、今の学生には魅力的に映っていないところもあるのは確かだと思っている。その中でも、直接的にそれがいい方向に行くかどうかわからないけれども、例えば給料、賃金少し上げてみるとか、その物理的なところでこういっているとこなのだけれども。町の考え方としては、中身をもっと意味のある、やりがいのある教育を進めれば先生たちのなり手が増えるのではないかということで頑張っているので、なるべく魅力あるように、映るように清水小学校も、町内卒業した生徒が教育実習にも来たりとか、毎年来ているので、そういった方にはなるべく教員になってもらうような働きかけをしていきたいと思っている。

佐藤委員：私の中学校時代は、夏は野球冬はスケートやって、先生方にも遅くまで付いていてもらったことがあった。先生は休みがないのではないかという思いもあったが、今はそんなこともないのか。

学校教育課長：山下教育長、山川指導幹も校長先生までやって、そういう時代で多分ずっとやられてきた先生方だと思っている。ただ、今の教員で分業というか、家庭も大事にとか、今の時代に沿ったような、そういう先生も多いので、働き方のスタイルというのは、私が客観的に見ている感じでは、考え方が少し違ってきていると思っている。

教育長：私たち時代はそれに生きがいを感じていたし、やりがいを感じていた、それが教員としての仕事という考え方があったので、今はもっとスマートにならないといけないので、そういう点は大分違ってきていると思う。ある面それが大事なことだと思う。ただ、先生方もその中で時間がなかなか生み出せないので、逆に言うと、子供たちの関わりの時間が少なくなってきたり、自分がこういう授業をしたいけれども準備するための時間が十分取れなかったりして、結局そこにうまく授業ができない、或いは子供と関わりが十分持てないということで、逆に昔よりもやりがいというか、良さが実感できないという現状もあるので、何とかその時間を生み出して、そのために子供たちと関わる時間、或いは教材研究して授業する、そういう時間を生み出していくことが、逆に先生方の魅力を感じていただける体制ができると思っている。

西山委員：この間の講習会の中で、不登校の児童が少しずつ出てきているという話があったけれども、清水町でもそこそこ不登校の方は出てきているか。

学校教育課長：不登校で私の押さえの中では、清水中学校、御影中学校もそうであるけれども、大体全体をとおすと30人弱ぐらい。あと登校渋りみたいなことも含めるとその前後ぐらいはいると思っている。学校の方も適切に関わりを持ったりとか、家庭とか、話を聞いたり、学校に来ることがすべていいということではないと思うけれども、共同生活がしっかりできるようにとか、学びがしっかり保障されるような工夫は進めているところである。

西山委員：不登校と言ってもすごく難しい問題で、家庭にもあるだろうし、子供にもあるだろうし、色々な環境が重なってなると思うので、簡単に指摘することはできないので大変だと思うけれども、あと、いじめの話になるけれども、いじめの対策として、担任の先生が１人で悩まないように校長教頭がしっかり把握して対応していかないと、なかなかその辺が少し欠けているというところも見られたので、その辺対応できるように考えていったらいいと思う。

山川指導幹：まさにそのとおりだと思う。今の時代本当１人でやっていて何もいいことはない。色々な人が関わるからこそ色々な知恵、アイデアが出るのであって、１人で悩んでいても本当に大変。今日の新聞にも出ていたけれども、福岡で新採用の教員が１年目で自殺したといって、母親が訴えて訴訟になっているけれども、本当に何をしていたのかという、新卒１年目の教員にそんなとこまでこうなってしまうには絶対何かあっただろうと思うけれども、やはり新卒云々ではなくて１人でやるというのは、本当に辛いというか、アイデアに詰まったときにはどうしようもなくなってしまうので、校長教頭というのももちろんあるし、困っている同僚を見て声をかけられる、そのためにも教育長も先ほど言われたように、６時間授業がずっと続いていたら、放課後にすいませんちょっとという話もできないというか、中学校などは部活始まってしまうとなってしまうから、そういう意味でも、そういう時間を作っていかないと解決していかないのではないかと思う。

学校教育課長：勘違いしていたことがあったのが、小学校と中学校は同じ先生同士で繋がりもあって、交流がしっかりできているものだと思っていた。話し合いとか、引き継ぎみたいなものが意外とうちの町だけではなくて、色々な町もそうだけれども、思っている以上に実は文化の違いとか見えない壁があったのは事実だと思う。でも、この業務を始めていったときに、その壁が少しずつ崩れているのが今実感している。西山委員が言われたいじめとかも、小学校のときにこういうクラスで、この子とこの子はこうだったということがしっかり中学校行ったときにその情報が繋がっていれば、上の学校の先生たちは対応できる。今までできていると思っていたのがいまいちできてないところがあったので、そういうところも小中一貫教育のメリットの大きな１つではないかと思う。

西山委員：今言われたように、小学校で何が起きてるか中学校にしっかり報告してあげないと、中学校は何もわからないので、そういうことが二度起きてくるという事例も何回もあったのでそういうことが一番大事だと、先生たちも守ってあげるというのが一番大事だと思う。この時代で親は自由勝手にわがままな時代で何でも言うので、そういうところも欠けているので、先生たちもしっかり守ってあげるということも大事だと思うのでよろしくお願いする。

教育長：そのとおりで、いつも私達が学校、校長教頭に言ってもやっぱり組織なのである。１人に任せないで組織で対応していくということが、いじめも不登校もそうであるが組織的に対応していかないと十分に対応できないし、組織を大事にしながら皆で対応していく。うまく繋がらない場合がたまにある。この先生は知っているが他の先生は知らなかったということのないように、常に皆が情報を共有しながら同じ方向を見て、子供たちを皆で見て対応していくということをこれからもしっかりと対応させていきたいと思っているのでよろしくお願いする。

委員長：大体皆さんの質問を終わったということで、概ね理解をされたと思う。教育委員会からの説明についてはこれをもって終了したいと思う。

【説明員退席　１１：２７】

（２）まとめ

委員長：まとめということで、特に皆さんの方から何か載せたらいいというようなことがあれば出していただきたいと思う。最終的にまとめについては私と副委員長、そして事務局と協議しながら進めていきたいと思う。それでよろしいか。

（「はい」との声あり）

議会事務局長（大尾　智）：今回小中一貫教育についてということで、前回６月から所管事務調査しているが、９月の道外研修もあるので、今回については、全体的なまとめは作らないで、来月道外研修行って更に小中一貫を学んでということになるので、９月議会でも引き続き小中一貫についてということで所管調査の報告をさせてもらって、まとめについては全部終了してからということになるので、９月議会についてはいつものような委員会報告はなしということでよろしいか確認をお願いする。

委員長：確認だが、只今事務局から話があったように、継続という形で今後進めていきたいと思うのでよろしくお願いする。本日の簡単なまとめについては委員長、副委員長と事務局と協議しながら進めさせていただく。その他皆さんの方から特に何かあるか。９月定例会がこれから始まるが、終わった後すぐ道外視察ということで、四国の方に向かう形になる。そういった部分では事前勉強を１度しなければならないと思う。

議会事務局長：議会初日はいつもだと次の所管事務調査の中身を決めたりということで、両委員会初日に委員会をやっている。その中で、実はこちらから行くところに対する事前勉強プラス事前に質問事項を取りまとめたいと思っていた。なので、初日後の中でまず事前勉強含めてやっていただいて、１回で終わらなければ合間を見ながら、例えば、一般質問終了後にやるとかいうことも必要なのだろうと思う。その辺は委員長と事務局で話をして、とりあえずは３日終わってから。実は、行った先からも事前に質問事項あればは欲しいという話もされているので、その辺含めて、やらなければならないと思って、まず３日にそういう話をさせていただきたいと思っている。

委員長：道外研修の事前学習ということで、９月３日、定例会初日終わった後にやるということでよろしいか。

（「はい」との声あり）

（３）その他

委員長：その時には、事前に皆さんに配ってある事務局からの資料、ホームページの写しだとか色々、それぞれの資料を読んで、３日にはそれに基づいてするような形でやりたいと思うので、読み込みの方もよろしくお願いする。次回は９月３日ということで実施するのでよろしくお願いする。その他なければ、以上で本日の厚生文教常任委員会を終了する。

【閉会　１１：３１】